



「希望の光」(要旨)
聖書箇所：創世記3章14-24節

【1】 暗闇の現実

本朝の聖書箇所は、人の墮落と不従順に対する神の裁きの宣告が記されています-産みの苦しみ、支配関係からくる悩み、重労働の苦悩とその先にある死、そして人のエデンの園追放-全体が暗闇に覆われているように見える箇所です。人の墮落と不従順の結果、人は罪を持って生まれるようになりました。その人間の悲惨さについてハイデルベルク信仰問答は次のように表現します。

「…わたしは(神である主を愛しなさい、隣人を自分のように愛しなさいという教えを知っていながら、)神と自分の隣人を憎む方へと生まれつき心が傾いている¹」。人は自分の「罪性」になかなか気付くことができません。「あの人よりは正しく生きている」、「法に触れるようなことはしていない」、「人に迷惑はかけていない」等。罪を人との関係性の中で、相対的に認識しようとしません。しかし、人ではなく、神の前に立つとどうでしょうか。神の前で自分がどのような者かを知った詩人は、次のように告白せざるを得ませんでした。「ご覧ください。私は咎ある者として生まれ 罪ある者として 母は私を身ごもりました。」(詩篇 51:5)

▷神の前に立った時、私たちは誰一人例外なく、罪を持って生まれた悲惨な存在なのです。

【2】 最初の福音

神がこの世界を造られた時、神は「見よ、それは非常に良かった」(1:31)と、ご自分が造られたものを喜びました。その喜びや明るさは本朝の箇所に見られません。神は人に裁きの宣告をしました(3:16-19)。蛇と大地には呪いに続き、「わたしは敵意を、おまえと女の間、おまえの子孫と女の子孫の間に置く。彼はおまえの頭を打ち、おまえは彼のかかとを打つ」(3:15)と宣告されまし

た。この宣告について、D.キドナーは「福音は、人間に対する直接的な約束ではなく、敵にくださる判決として最初に現れる²」と解説します。人を誘惑し滅びに陥れようとするサタン(蛇)の頭を打ち砕くのは、「生きるものすべての母」(3:20)、エバの子孫なのだと言われたのです。代々の教会はこの箇所を「原福音」(Protoevangelium)と呼び、「救い主を送って、サタンのわざを打ち砕くと約束された」と告白してきました(参照:ローマ 16:20, JECA 信仰告白第3条『神のみわざ』解説文)。「救い主」の到来は、人の願いの実現ではなく、神のみこころの成就でした。

▷暗闇に覆われているように見える本朝の聖書箇所に、福音-good news-の光が差し込んでいたのです。

【3】 希望の光

罪の結果、私たちは痛み、悲しみ、そして死を恐れています。世界には不安が充満しています。そうした私たちを救うため、希望の光としてこの世にお生まれくださったのがイエス・キリストです。「(イエスは)死の力を持つ者、すなわち、悪魔をご自分の死によって滅ぼし、死の恐怖によって一生涯奴隷としてつながれていた人々を解放するためでした。」(ヘブル 2:14-15)

▷暗闇が私たちを覆っているように見える今、希望の光としてこの世に生まれたイエスを心にお迎えすることができますように。「光は闇の中に輝いている。闇はこれに打ち勝たなかった。」(ヨハネ 1:5)

¹ 吉田隆記『ハイデルベルク信仰問答』新教出版社

² デレク・キドナー著『ティンデル聖書注解創世記』いのちのことば社